

地域の力になれる喜び、 仲間意識の温かさが原動力に



私は建設業を営んでいますが、震災が起きた時は建築中の屋根の上で作業をしていました。気が動転してしまうほどの揺れで、屋根の木材にしがみつるのがやっとでした。声が出ないほど恐ろしい思いをしました。場所は、市街地から離れた田畠に囲まれたところで、山の方を見ると一気に飛散した花粉で所々が黄色に染まってみえました。屋根の瓦が次々と崩れ落下していました。揺れが一瞬止まったときに急いで屋根から降りました。その後、消防団の団長から連絡が入り、管轄区域を回るよう指示を受けました。

私の担当は八郷地区という山間が中心で、比較的大きな被害はありませんでしたが、水や電気のライフラインが途絶えたので、給水を中心とする救援活動が求められました。市街地から距離がありましたから、地区の住民に必要な量の水を確保することは難しい状況でした。迅速な対応を迫られる中、貯水槽の水なら飲めなくても生活用水として役立つの判断に至りました。10トンぐらい配給したと思います。団員たちは復旧するまで休む暇なく動きました。ある若い母親から「赤ちゃんのおむつなど、洗いものに困っていましたが、水の配給があったので、本当に助かりました」と言われました。水を取りに来られない高齢者のところには、家まで行って水を提供しました。「ありがとう」とたくさんの方々に声をかけていただき、少しでも地域のためにできることを嬉しく思いました。

私は25歳で消防団に入り、今年で32年になります。消防団の仕事は、本業の建設業を勤めながらのボランティアですが、火災があると自分の仕事を後回しにして消火活動に専念します。今回の震災では長い期間にわたって救援活動に携わることになりました。お金になる仕事ではありませんが、団員同士の結束力、仲間意識の強さに動かされてここまで続けてこられたと感じています。そんな父親の姿に感化されたのか、それまで消防団に関心を示さなかった26歳の長男が同じ消防団に入団すると聞いたときは、正直驚きましたが、感慨深い思いも湧きあがりました。人命に関わる仕事をあることを真剣に受け留め、消防団の活動を通して地域の力になれる喜び、人間関係の温かさを実感し、人として大きく成長していくことを願うばかりです。

前嶋 慶一さん
石岡市消防団 副団長

“人命第一”の思いを強め 地域のコミュニケーションを図る



その日は仕事が早く終わり、帰宅してまもなくあの震災に遭いました。これまで経験したことがない大きな揺れに、これは大変なことになったと思いました。とっさに頭の中をよぎったのは、近所に住む高齢者ことです。副区長でもあったので、区内の高齢者の情報に通じていました。電話が通じず手間取りましたが、消防団員らと連絡をとり、一人暮らしの高齢者の安否確認を進めることにしました。ただ、石岡市内の中心部の道路は、あちこちに段差ができ、マンホールが1メートルも突き出て、国道が通行止めになっているところもありましたから、車では思うように動けない状況でした。

災害対策本部が設置され、本格的な救援活動が組織されたのは午後4時ごろでした。道路状況や燃料のことを考えて、車よりも自転車やオートバイを利用してみてはどうかと提案しました。団員たちの協力を得て、自転車とオートバイを集め、それに乗って夜遅くまで安否確認を続けました。

電気と水道が復旧するまでの3日間は、給水が主な活動でした。利用できる井戸など水のある場所を確保し、小中学校を中心に回り、高齢者の家には水を届けました。どこに行っても水を求める人の長蛇の列ができていました。私は自営の仕事を1週間休み、少しでも地域の皆さんの助けになりたいと思い、救援活動に携わることができました。

震災の経験は本当に辛いものでしたが、学ぶことが多く、私自身の考え方にも大きな変化をもたらしました。消防団では、団員は震度5弱以上で最寄りの分団本部に集まり、新たに導入されたデジタル無線機を使い、地域の方々の安否確認、火災や道路状況の点検など、救援の徹底した体制が整えられました。私個人としては“人命第一”で迅速に動く大切さを再認識させられました。そして、相手を理解する心を育むことが救援の本質ではないかと考えさせられ、日頃から高齢者を中心に地域の方々とのコミュニケーションを図ることに努めています。思いやりの心が、活動の場でこれまで以上に浸透していくよう働きかけていきたいと思います。

櫻井 健さん
石岡市消防団 副団長

震災を通して ～小・中学生の作文より～

普通が幸せ

和島 未藍
石岡小学校6年



平成23年3月11日、この日の出来事は、今でも私の心に深く残っている。

2年生だった私は、教室で帰りの用意をしていた。次の日が休みということもあり、上ばきや体操着などを持ち帰る準備をしていた。帰りの会も終わり、みんなで帰ろうとした瞬間、ぐらぐらと大きな揺れが私たちをおそった。いつもの地震だろうと思い、机の下にかくれた。しかし、いつもとは違った。なかなか揺れがおさまらず、だんだん大きな揺れとなり、恐怖がおそってきた。地震がおさまった直後、私たちは校庭に避難した。上ばきもはいていなくてはだしのままで……。体育館のガラスが割れ、さらに私たちの恐怖が高まった。また、次の地震が来た。地面が波打つような感覚で、どうしようもないくらい怖かった。お母さんが学校まで迎えに来てくれ、お母さんの顔を見た瞬間、涙があふれてきた。

この日の夜は、電気も水も使えず、生活に必要なものすべてが地震に奪われた気がした。私たち家族は、地震に備え、車の中で夜を過ごした。怖くて怖くて、全然眠れなかった。次の日家に戻ると、いろいろな家具が倒れ、物が散乱し、初めて地震の怖さを知った。テレビでは、東北地方の様子を伝え

る映像がたくさん流れていた。その映像を見たとき、東北の人たちは、私たちの何倍も何十倍もの恐怖を味わったのだろうと、心が苦しくなった。この地震によって、たくさんの人の命が奪われ、今まで生活してきたものすべてが一瞬にしてなくなってしまったのだ。当たり前の生活がどれだけ幸せなことなのかをその時に初めて感じた。

あの地震から3年が過ぎ、そのときのことを少し忘れるがちになっている。しかし、あのたくさんの被害を出した地震のことを心に刻み、普通の生活ができる幸せをもう一度しっかり考えてみようと思う。

東日本大震災

雨貝 帆夏
府中小学校5年



2011年3月11日、私が1年生の時でした。今までに体験したことのないくらいの大きい地震でした。その当時のことはしようじきあまり覚えてないのですが、教室の水そうの水がゆれてこぼれていたくらい大きなゆれであったことは覚えていました。家に帰る途中、へいがこわれている家もあれば、屋根がこわれている家もあってびっくりしました。お母さんとお姉ちゃんを学校に迎えに行くと信号機も止まっていて、けい察の人が手信号をしてい

ました。コンビニエンスストアに寄ると、真っ暗の中にお客さんがいっぱいいました。レジが使えなくなっていたので電たくで会計をしていました。行列ができていたのにお客さんはおこったりせず、車のライトを照らして協力する人がいました。家に帰ると電気が使えないでの、寒いけどヒーターは使えず、トイレも使えず、ろうそくを立てて過ごしました。それと水も使えなかつたので、お風呂も入ることができませんでした。何日かすると、近くの小学校に給水車が来たので水をもらいに行って水が使えるようになりました。あたり前のことがあたり前ではなくなることの大変さを経験することが出来ました。電気も使えるようになります、やっとテレビを見ることが出来たとき、とてもしようげきを受けました。それは津波のことです。私達の生活でもつらかったのに、それ以上にも感じる津波のぎせい者を考えると、とても心がいたみました。1年生の時は、この地震のおそろしさを感じることが出来ませんでしたが、今になって思うと、おそろしさを感じることが出来ます。

東日本大震災は、これからも忘れることが出来ないと思います。いい思い出ではないけれど忘れてもいけない出来事だと思います。この体験を忘れずに、あたり前をあたり前と思わないで、日々感謝して過ごしたいです。

東日本大震災をふりかえって

名畑 佳祐
高浜小学校5年



ぼくは、3月11日の大震災の日をふり返るといろいろなことがあったなと思います。

3月11日のあの日、ぼくは、1年生でした。チャレンジタイムが終わって、ランドセルをもってこ

ようとした時に、地震がおきました。最初は、ゆれが小さかったけれど、どんどんゆれが大きくなっていました。ゆれがおさまると、内田先生がメガホンで、

「すみやかに外へにげてください。」
と、言っていました。

それを聞いてぼくたちは、すぐ外ににげました。みんなが外へ出てから、教頭先生の車のラジオを聞きました。ラジオから地震の震度を聞き、とても大きい地震だと分かりました。

少しだってから大人の人も学校へ来ました。そのうちに、お母さんがむかえに来て、お姉ちゃんとぼくと、お母さんで家にもどりました。

家に帰るとちゅううも、ものすごくゆれて、ときには、ゴーという音が聞こえました。

家に着いたら、すっかり夕方になっていました。家の手前のかわらがほとんど落ちていて、おどろきました。食べる物もなく、みんなで家にあるものを食べました。

次の日は、地震はおさまりました。2階の様子をみようと、2階に上がってみると、テーブルの上がめちゃくちゃで大変でした。それをみんなで一生懸命片づけました。

2日目の夜は、2階で寝ました。いつでもすぐににげられるように、ねるそばに、くつをおき、とおるところはなにもないじょうたいでねました。その夜は地震がおきなかつたので、うれしかったです。

3日の朝、ついに電気がとおりました。

ぼくは、とてもうれしかったです。その日の夜は、おふろにも入れました。水がにごっていたけれど、おふろに入って少しほとしました。テレビをみたら、東北地方では津波が来て、とてもかわいそうで、テレビをみていられませんでした。

そしてこれまでをふりかえると、学校でのひなんくんれんは、地震のときととても役に立ちました。東日本大震災のこと、津波にさらわれてなくなった方々のことを、ぜつたいに大人になってもわすれずにいたいと思います。

学校でやっているひなんくんれんは、とても大

切だということが分かりました。

東日本大震災

若山 扇利

東小学校6年



東日本大震災が起ったのは、忘れもしない、私が小学校3年生の3月11日午後2時46分でした。

突然グラグラとゆれ出し、教室のみんなは先生の指示で急いで机の下にもぐりました。クラスの水そうがガシャンと音を立て、台から落ちて割れてしまい、金魚が床の上でビチビチしていたのを覚えています。

ゆれていた時間が長く感じ、これからどうなってしまうのか、家族のみんなはどうしているのかなと、とても不安でいっぱいでした。

わんぱく広場に避難したとき、周りには「怖いよ。」「お母さんーん。」などと言っている子や泣いている子、それもできずにじっとがまんしている子もいました。

私は今まで体験したことのない大きなゆれでびっくりし、どんどん怖くなってきて、友達とずっと手をつないでいました。

母がむかえに来てくれて、6年生の兄と一緒に家に帰ってみると、食器がたなから飛び出して割れたり、いろいろな物が落ちていたりして、ぐちゃぐちゃになっていました。

家族みんなで一部屋に集まり、夜は真っ暗で何も見えないので、ろうそくの明かりでおにぎりを食べました。

電気も水道も止まってしまい、トイレはおふろの水で流したり、買い物やガソリンスタンドに並んだり、水の配給に行ったり、いろいろと大変でした。

数日後、テレビを見たら地震のニュースばかりやっていました。津波におそわれて家などが流されたり、大火事になっていたり、とても現実だと思えない映像でした。大勢の人が亡くなったり、行方不明になってしまったりしていることを知り、本当に大きな災害が起きたということを知りました。

後で気が付いたことですが、私の家もかべにひびが入っていたり、瓦がたくさん落ちて洗たくざおが折れていったり、庭にも小さな地割れができたりしていました。

近所では、へいがたおれていたりお墓がくずれてしまっていたり、木がたおれていたり危険な場所がたくさんありました。姉には、マンホールが飛び出していた話を聞きました。

学校は休みになりいつもより長い春休みになりましたが、しばらく余震が続き落ち着かない日々を過ごしました。

今でも地震が来てゆれたりすると、また同じようなことになるのではないかと心配な気持ちになります。あのとき、パニックにならずにすんだのは、大切な友達や家族がそばにいて、みんなで支え合ったからだと思います。改めて、友達や家族の大切さを感じました。あのときの気持ちを忘れないように、いつまでも周りの人への感謝の気持ちをもち続けたいです。
「ありがとう。」

特別な日3.11

五島 功貴

三村小学校6年



あの日の記憶は、いつまでも自分の頭の中に残り続けるだろう……。

あれは、3年以上前に起きた出来事だ。これから週末でたくさん遊べる、はずだった……。学校の校庭から出た瞬間に、激しい揺れが僕達を襲った。びっくりした。何がおこったか全く分からなかった。地面が生きている。僕にはそう思えた。校庭で先生が叫んでいる。揺れがおさまってもどうしたらいいか分からなかった。そして、校庭に戻るととりあえず待機させられた。校長先生の話も慌てているのか、早口でよく分からなかった。校庭は、騒然としていた。

しばらくして、先生と一緒に下校することになった。みんなびっくりしたようで泣いている1年生や蒼然の顔のとまどう先生、いつもと違い慎重に歩く上級生。みんな普段とは異質な雰囲気だった。勿論、誰も自分から口を開こうとはしなかった。途中には、全部壊れた扉や落ちて散乱した屋根瓦、割れた窓ガラスが見えた。それを目にしましたと家がどうなってしまっているのか心配でたまらなかつた。

やっと家に着いた。家の中では、照明が落ちて割れていた。帰ってきたお父さんの顔も酸楚なことが受け取れた。妹は幼稚園の遠足だったらしいが、楽しかったかななんて聞く余裕もなかった。その日から夜は蠍燭の華奢な光で不安な夜を眠ることになった。

僕には、こんな形で自然の力をまぎまぎと思い知らされたのだ。僕は一生忘れない。忘れる做不到のできない1日になってしまった。悲惨な日であり、特別な日となつた。そして今、僕達はこの大震災で、災害について考え直す必要があると思う。

ふだんの生活のありがたさ

渡邊 優那
関川小学校6年



私は、死の恐怖を初めて体感しました。

3月11日「東日本大震災」が起きました。私は、頭が真っ白になり、何もかも分からなくなりました。そして、このままどうなるのだろうとしか考えられなくなり、友達と泣いていました。

地震がおさまってきたころ、大体のお母さんたちが、他のみんなをむかえに来て、みんな帰っていました。

ところが、私の家からは、まだだれもむかえに来ませんでした。私は、おばあちゃんと妹に何かあつたのではないかと悪い方に考えて、だんだん心配になりました。やっとおばあちゃんがむかえに来て、無事だと分かり安心しました。

そして家について、また不安が増しました。今まで見たこともない、しょうげき的な光景を見てしました。家に帰るまでには、瓦が落ちている家は1軒もなかつたし、想像もしていなかつたので余計でした。家の瓦が庭全体に落ちていました。家のドアに行くまでがあぶなくて、家の中へどうやって入ればいいのだろうと不安になりました。どうにか瓦をどかし、入ることができました。やつと安心できました。

そして地震の次の日、電気がつかなかつたので、ろうそくを使って過ごしました。そして、ご飯はおにぎりと缶づめの生活が続きました。今までの生活と逆転し味わつたこともない日々が続きました。そして水が出ないので水を学校まで取りに行きました。私は、今まで学校に水を取りにこないといけないのだろうと思いました。

私は、不便な生活で学んだことがあります。地震では、いつも当たり前だと思っていたものが、全